

会いすることもなかったのですが、才さんは学校の先生だとのことでした。心からお礼を申しました。

娘は、私の頭を見て「切ったのね。誰にも負けない美しい髪だったのに。私も、切って」と言うのです。

「あなたの髪は、母さんが守ってあげます」と言って、細い三つあみをいくつもつくり、頭の上につきちりと止めて帽子をかぶせました。可愛い少年のようでした。

韓国まで何日かかるか知れませんが、煎（い）り米を作り、ビスケットを焼き、一人一人のリュックに詰めてから、夜になるのを待ちました。午前零時、七家族で脱出を開始。昼は山中で寝て、夜中に歩くのです。子どもたちとは、はぐれないよう口トプでつなぎ、引きずるように進みます。

私は、熱が出てもうふらふらでした。三日目の夜、主人が「あの山を越えたら三十八度線だよ。頑張りなさい」と力づけてくれました。どんなことがあっても、子どもたちを内地へ連れて帰らなければとの思いで、亡き姉に祈りながら歩きました。

午後十時ごろでした。四人の朝鮮人が来て「子どもたちがかわいそうだ」と複線のトンネルに連れて行き「ここで寝なさい」と言うので従いました。

何時ごろだったか分かりませんが、入口の方にたいまつが燃えて見えました。お金を奪いに来たのです。主人は「だまされた」と言いました。私は、とっさに地面を手で掘って所持金全部を埋め、その上に座りました。

主人と二人の子どもは、金を全部

奪われました。私にも「出せ」と言いましたが「ない」と言うと、ほおをぶたれました。主人が「妻は病気だから許してくれ」と頼み、その場を逃れました。私の手は、血だらけでした。

夜が明けたので、早く山を越そうと歩き始めました。血だらけの私の手を見て、主人が「どうしたのだ」と、小さな声で聞きます。「お金を土の中に埋めておいたのよ」と取り出して見せました。「お前は」とあきれていました。

ほかの人たちも全員、お金を奪われていました。南（韓国）へ行けば使えなくなるからとあきらめていたようです。

山を登ると、主人は「あれがトウセンという川だよ。三十八度線だ。もう、安心だ」と言います。私